

## 「孝」の思想と遺伝子

たびたび繰り返しますが、「教育の原点は家庭に在る」、これからの教育は何よりもこの原点に立戻ることが肝要だと思ひます。昔は「嚴父慈母」といふ言葉が存在しました。嚴父の嚴とは、子に厳しいことよりも、白身に厳しいことを言ひます。なぜなら、『孝経』には「嚴によりて敬を教ふ」とあるからです。

人を尊敬する心は、親を尊敬する心から発し育つものです。故に、人の子の親たる者は、子が尊敬せずにはゐられないやうな親であるべく努力する責任があります。同様にして、人を愛する心は親を愛する心から発し育つものですから、親たる者は子が親を愛せずにはゐられないやうな親であるやう、親が十分に慈愛の心を発揮しなければいけません。

天子の孝を説いた、『孝経』の天子章にも「親を愛する者は敢て人をく悪まず、親を敬ふ者は敢て人をあなご慢らず」とあります。「親を敬愛する心が、他人をも敬愛する心を養ひ育てる」と言ふのです。天子が親を敬愛する心を以て万民を敬愛するならば、万民も天子を敬愛し信頼し、ひ延いては人々相互に敬愛し信頼しあふやうになるでせう。これが天子の孝であると言ふのです。

我が皇室は、歴代、この「天子の孝」を見事に実践し給うてみられます。ですから、国民が皇室を敬愛し信頼するのは、道徳が地に墮ちた今日、国民の多くが自分の親を敬愛する心を失つてゐるのにも拘らず、この社会が維持されてゐるのは、敬愛でき信頼できる皇室を身近に拝してゐるからでせう。これが『孝経』に言ふ「一人慶あらば兆民これに頼る」といふ事です。

このやうなわけで、親が嚴父慈母であるならば、その子は自然と人を敬愛する心を有った者に育ち、成人しては人から敬愛される人物になるのです。そしてこれが「孝の最終目標」なのであります。『孝経』には「孝は親に仕ふるに始まり、身を立つるに終る」とあります。親に奉仕することよりも、子が立派な人間になることの方がより大きな孝なのであり、親はそれを希求してゐるのであります。

この孝の思想は、現代の最も新しい科学に照しても納得できるものです。この頃遺伝子の研究で世界的な業績を挙げられた、筑波大学教授・村上和雄博士のお話を聴く機会がありましたが、そのお話に依れば、遺伝子は人間のものも単細胞の細菌のものも全く同じ構造であると言ふのです。